

白雲片片

第二十八回 寶慶記について

『寶慶記』^{ほうきやうき}は、道元禪師が宋国の天童山景德寺で本師の如浄禪師と交わした問答・手紙のやり取り・如浄禪師が大衆に対して行った上堂や普説を記録したものである。標題にある「寶慶」は宋国の元号であり、日本では嘉祿^{かろく}の頃、西暦では一二二五年〜一二二七年にあたり、ちようど道元禪師が天童山にいた時期と重なる。

発見されたのは道元禪師の遷化後、永平寺二世の懷裝禪師が方丈の遺品の中から見付けたと伝わっているが原本が失われており、道元禪師によつて『寶慶記』という標題がつけられていたかどうかは不明である。

寶慶記には写本がいくつかあるが、愛知県豊橋市の全久院には懷裝禪師直筆とされる写本が伝わっており、その奥書^{おうしょ}（巻末に著者名や年月日などを書いたもの）には次のようにある。

「建長五年^{みずのとうし}癸丑十二月十日、越宇^{えつう}吉祥山永平寺の方丈にあつて、これ

を書写す。右は先師古仏の御遺書の中にこれあり。これを草始^{そうし}するも、なお余残あるか。恨むらくは功を終えざりしこと、悲涙、千万端なり。」

この奥書から、発見された時点では完成された状態ではなかったことが窺える。一般的には和文の正法眼藏などのように門弟たちに公開する目的で編集されたものではなく、道元禪師が如浄禪師のもとで修行中に覚え書きとして記録しておいた手控えとされている。

本文の内容は坐禅に関するものだけではなく、例えば僧室内にて住持が襪子を履く作法や経行の正しいやり方、様々な刺激物や栄養価の高い食物に注意することなど、多岐にわたる事柄が記録されている。

どれも貴重な記録ではあるが、訳は簡略化していくつかを挙げてみる。

随時参問の許可

道元^{どうげん}、幼年^{ようねん}より菩提心^{ぼだいしん}を発し、本国^{ほんこく}にありて道^{どう}を諸師^{しよし}に訪い、いささか因果^{いんが}の所由^{しよゆう}を識^しる。しかもこのごとくなりといえども、いまだ仏法僧^{ぶつぼうそう}の實^{じつ}歸^きを明^{あき}らめず、徒らに名相^{みやうそう}の懷慄^{えひよう}に滞^{とどこお}る。後に千光禪師^{せんこうぜんじ}の室^{しつ}に入り、初めて臨濟^{りんざい}の宗風^{しゅうふう}を聞く。今、全法師^{ぜんぽうし}に随^{したが}つて炎宋^{えんそう}に入る。航海万里^{こうかいばんり}、幻身^{げんしん}を波濤^{はとう}に任せて、ついに大宋^{だいそう}に達し、和尚^{おしょう}の法席^{ほつせき}に投^{とう}ずることを得たり。けだしこれ宿福^{しゆくふく}の慶幸^{けいこう}なり。

(中略)願う所は、時候に拘わらず、威儀を具えざれども、頻頻に方丈に上つて、愚懷を拝問せんと欲つす。無常迅速、生死事大なり。時は人を待たず、聖を去らば必ず悔いん。

本師堂上大和尚大禪師、大慈大悲をもつて哀愍して、道元が道を問ひ法を問うことを聴許したまへ。

伏して冀うところは、慈照されんことを。

小師道元百拝叩頭して上覆す

元子が参問は、今より已後、昼夜の時候に拘らず、著衣、袈衣にして方丈に来て道を問うこと妨げなし。老僧は親父の無礼を恕すに一如ならん。

太白某甲

—道元禪師が如浄禪師に書面でお願いをして、それに対し如浄禪師が許すことを返信した内容となっている。仏法を求めて諸方を行脚した道元禪師が、如浄禪師の会下に列することができたことをこれ以上の慶びであると感じ、この稀有な機会の中、一刻も無駄にしたいくないので時間帯を問わず、正装をしていない場合でも如浄禪師の部屋に伺つて質問をしても宜しいでしょうか、とお願いをしている。それに対し如浄禪師が、

今後は昼夜の時間に關係なく、塔袈裟であつてもなくても、方丈に来て質問することは全く構わない。父親が子供の無礼を許すのと同じようにそれを許可しよう、と返信している。

教外別伝

宝慶元年七月初二日、方丈に参ず。

道元拝問す。

今、諸方に称する、教外別伝をもつて、祖師西来の大意となす、その意、いかに。

和尚、示していわく、仏祖の大道は何ぞ内外に拘らん。しかるに教外別伝と称するは、ただ摩騰等の所伝のほかに、祖師西来して、親しく震旦に到り、道を伝え業を授けたるがゆえに、教外別伝というのみなり。世界に二つの仏法あるべからず。祖師のいまだ東土に来らざるときは、東土には行季のみあつて、いまだ主あらざりき。祖師、すでに東土に到れば、たとえば、民の王を得たるが如し。まさにその時、国土、国宝、国民は、皆、王に属すべきなり。

—当時、禪宗が教学仏教とは異なることを強調するために「教外別伝」という主張をしていた。達磨大師が渡つて来る以前にも中国にはすでに

經典で伝えられた仏法があり、僧侶も多数存在し、寺院も建立されて經典の研究などは行われていたが、それらの教えの外に達磨大師が別に伝えたのが禅だ、といった主張である。

これに対し疑問を抱いていた道元禅師が如浄禅師に質問をしたところ、「迦葉摩騰（初めて中国に仏典を伝えたインド出身の僧侶）たちが伝えた文字による教え（教学）と、達磨大師が伝えた教えが違うことを強調したいがために「教外別伝」と言っているのであって、本来、釈尊の教えに教学・禅といった区別はなく、世の中に二種類の仏法はない。達磨大師が中国に渡って来られる以前は經典などの教えがあつたが正しい実践的な仏法がなかった。達磨大師が中国に来られた後は、例えば民（教学）が王（正しい実践）を得たようなものであり、達磨大師以前に伝わっていた教えは全て達磨大師に帰属したのである」と答えている。

仏祖の聖胎

和尚、ある時、召して示していわく、彌はこれ後生なりといえども、すこぶる古貌あり。直にすべからく深山幽谷に居して、仏祖の聖胎を長養すべし。必ず古徳の証処に至らん、と。時に、道元、起つて拝を和尚の足下に設く。

和尚、唱えていわく、能礼所礼性空寂 感応道交難思議、と。時に、和尚、広く西天東地の仏祖の行履を説きたまう。時に、道元、感涙襟を沾おす。

―ある時、如浄禅師が道元禅師を呼び寄せ次のように示した。「君は若い昔の仏祖に非常に良く似た風貌である。是非とも人里を離れた自然豊かな山間部に住んで、坐禅に精進して仏祖の正しい教えを修養しなさい。きつと仏祖と同じ境地に到るであろう」。そして道元禅師が如浄禅師に礼拝をすると、如浄禅師は次のように唱えた。「礼拝をする人と受ける人の性質はわだかまりがなく静かで落ち着いている。お互いの境地が感じ合ひ、応じ合つて交わることは、思い量ることが難しい」。その後、如浄禅師はインドや中国の仏祖の修行生活がどういふものであつたかを説いた。道元禅師は感激して涙で襟を濡らした。

祇管打坐

堂頭和尚、示していわく、参禅は身心脱落なり。焼香、礼拝、念仏、修懺、看經を用いず、祇管に打坐するのみ。

拝問す、身心脱落とはなんぞや。

堂頭和尚、示していわく、身心脱落とは坐禅なり。祇管に坐禅する時、

五欲ごよくを離れはな、五蓋ごがいを除くなりのぞ。(以下略)

—如浄禪師が「坐禪をすることは身と心が脱け落ちることである」、と示した。その「身と心が脱け落ちる」という言葉の意味について道元禪師が質問したところ、身心脱落とは坐禪のことであり、坐禪をすれば外部との関係で生じる五つの欲求と、自己の内面で起こる五つの問題を除くことができると示している。

※①五欲：色欲（眼を通じて生じる欲）

声欲（耳を通じて生じる欲）

香欲（鼻を通じて生じる欲）

味欲（舌を通じて生じる欲）

触欲（皮膚を通じて生じる欲）

（又は、財欲・色欲・食欲・名譽欲・睡眠欲の五つ）

※②五蓋：貪欲蓋とんよくがい（欲求を満たそうとすること）

瞋恚蓋しんにがい（腹を立てること）

睡眠蓋すいみんがい（眠くなったり怠けること）

掉悔蓋じょうけがい（浮ついたり悔んだりすること）

疑蓋ぎがい（疑うこと）

今年六十五歳

堂頭和尚どうちやうおしょう、示しめしていわく、世尊せそんのたまわく、聞思もんしはなお門外もんげに処しよするが如ごとく、坐禪ざぜんは直じきにすなわち歸家きか穩坐おんざするなり、と。ゆえに坐禪ざぜんは一須臾いちしゆゆ一刹那いつせつななりとも功德くどくは無量むりやうなり。我われは三十余年さんじゅうよねん、時ときとともに功夫くふう弁道べんどうして、いまだかつて退たいを生しょうぜず。今年ことし六十五歳ろくじゅうごさい、老ろうに至いたつていよいよ堅かたし。爾なんじもまたこの如ごとく弁道べんどう功夫くふうせよ。あたかもこれ仏祖ぶつそこんく金口きんくちの記きなり。

—如浄禪師が次のように示した。「釈尊は、仏法を聞き仏法を思うことは門の外かどにいるようなものであるが、坐禪をすることは真まつ直ちかぐ家に帰かへつて穩まやかに坐まつているようなものであるとおっしゃった。わずかな時間の坐ま禪ぜんでも、その功德は量り知れない。私は三十数年間、坐ま禪ぜんを続けてきてやめようと思おもったことはなく、今年で六十五歳ろくじゅうごさいになったが、益々坐ま禪ぜんに励むむ気持ちが増ましてきている、君もこのように坐ま禪ぜんに励むみなさい」。

如浄禪師は道元禪師が天童山を下くだつた後、寶慶三年七月十七日に六十歳で示寂しじやくしたと伝えられており、寶慶記は如浄禪師最晩年の記録である。実は中国で編集された僧伝では如浄禪師についてほとんど触ふれられておらず、正法眼蔵をはじめとする道元禪師の著作の中においてこそ、厳格で慈悲心に満ちた生前の如浄禪師の姿が偲おもばれるのである。